

民の意味・民の事業

会長理事 庄司興吉

1 民は民間企業？

民の意味・民の事業ということについてお話しさせていただきます。きっかけは今年の8月にあったPCカンファレンスで感じた問題について、9月の理事長・専務理事セミナーで話したことです。

PCカンファレンスのスローガンに「産官学民際連携」とあったので、この順番はおかしいのではないか、民学官産連携というべきなのでは、と言いました。それについてまず、「際」とは何か、と聞かれました。際は国際とか民際とかいう時に使う際で、インターの意味です。産官学民に際が入って「産官学民際連携」になったのでしょうか。産官学民のあいだ相互の連携ということを言いたかったのだと思います。

PCカンファレンスでも理事長・専務理事セミナーでも言ったのですが、日本人は「産」を最初に出すのが好きで、「産学連携」「産官学連携」というような言い方をよくします。産学協同が発端ですが、これは産業界がもともと言い出したもので、産業界が「産学連携」というのは当然です。しかし、学のほうが受け止める時には、主体的に受け止めなければいけないので、学産連携と言うべきです。

たとえば外交関係でも、日本は日中関係というけれど、中国は中日関係というのと同じです。どちらが主体であるかということなので、学の立場であれば「学」が最初に、民の立場であれば「民」が最初に、来なくてははいけません。そこで、この場合には「民」を最初に出して「民学官産際連携」が正しいのではないかと言ったのです。なぜなら、「民」は大学を構成する人びと、つまり学生院生教職員のことですから。その意味で、生協は大学構成員によってつくられているので、「生協は大学における民だ」といったのです。

これにたいして、「生協は民だ」というと「誤解を受けるのでは」という指摘をいただきました。「産官学民際連携」でも「民学官産際連携」でも産が冒頭に来ているか、あるいは間に入っているかで、この場合の民が民間企業と理解される可能性はないと思ったのですが、「生協は民」という言い方が一人歩きすれば、たしかに生協は民間企業と同じような立場にあると誤解される可能性はあります。その点では、少し注意が足りなかったと思います。

あらためて言いますが、私の言う民は民間 **private** の意味ではなく人びと **people** の意味の民なので、漢語を使えば人民ということになります。

2 民の歴史

そこで、民の歴史を振り返ると、最初、民のほとんどは農民で、その支配のうえに王国が生まれ、帝国が生まれました。王国や帝国は支配の拠点として都市をつくり、そこに住む民が市民となりました。市民は商人や職人であったわけですが、帝国の膝元の都市は支配が厳しく、市民は自立できませんでした。

歴史的事情で帝国の支配がゆるんだ都市に自治する市民が生まれ始めるのです。古代ギリシアの例はその先駆ですが、市民たちが基底にあった奴隷制に依存して好きなことをやっていただけだったので、あとが続きませんでした。ようやく 11 世紀以降の西欧の都市で自治する市民が生まれ、市民たちは自治を都市から社会全体へと広げていって、先に立った者から国民国家をつくって、競い合いながら世界全体を植民地化していったのです。

周知のようにこの過程は、商業や工業で巨富を積んだ市民すなわちブルジョワの主導で行われました。この意味で市民革命は、最初はブルジョワ革命であったわけです。しかし、市民の理念は普遍的であったので、労働者をも刺激し、労働者農民その他市民一般の政治参加の流れをつくりだしていきました。そしてその流れは、植民地の民衆をも刺激し、独立と市民社会化の流れをつくりだしていったのです。

こうして現代の世界は、まだはなはだ不完全ながら、基本的には市民社会となってきました。この世界が市民社会になってきたというときの市民は普遍的市民すなわちシティズンです。ブルジョワではなくシティズンという意味の市民によって、地球市民社会と言えるようなものが、非常に緩やかにではあれ、できてきつつあるのです。

3 生協は民の事業

そういう文脈で生協のことを考えてみると、生協は発端となったロッジデールからして民の事業でした。民間の事業といえばそうなのですが、私的 **private** ではなくて、広い意味での共同 **common** の一環としての協同 **cooperative** の事業であったわけです。キョウドウに共働、共同、協同、協働の 4 つの意味があるということと、それらの相互連関にかんしては昨年の初めの理事会で話し、私の近著『大学改革と大学生協』に収録してあります。

このこととの関連でいうと、今、社会学や政治学などの世界で、公共性の議論、つまり公と私とのあいだに共を挟む発想が必要なのだという議論が、しきりに行なわれています。この文脈で言うと、近代の市民社会になって公私分裂が起こる以前の共と、公私分裂のあとでそれらを止揚した共があると言っていいでしょう。

まえのものを通常ゲマインシャフト（共同体）といい、あとのもの、つまり資本主義社会の公私分裂を止揚した共をゲノッセンシャフト（協同社会）ということがあります。ゲノッセンシャフトはテニースが使った言葉ですが、同時に協同組合という意味にもなります。

生協は、まだ市民になりえなかった労働者が自己防衛のために起こした運動で、そのようなものとして世界に広まってきました。この過程で同時に、世界中の多くの労働者が参政権を獲得して、だんだん市民になってきました。中国の労働者すなわち「工民」は、中国がまだ普通選挙の制度を持っていませんので、残念ながらそういう意味での市民とは言えないかもしれませんが、彼らも遠からずそうなるであろうと私は思っています。

そのような展望のもとで、協同組合を民の事業として考える。ブルジョワではなくてシティズンの事業として考える。つまり、かつては労働力以外に何ももたず、参政権も有しなかった労働者が、今やそれなりの生活基盤を持ち、参政権も有しているので、シティズンすなわち市民として協同して事業を行う。それが私的企業ではなくて協同組合の意味なのです。

しかもそれを、消費生活協同組合から、より積極的に事業を行う協同組合に変えていく。そういう意味で、今、そのための法律がつくられようとしています。労働者協同組合の

意味は非常に大きいのです。

4 大学の民は構成員

大学の民は、学生、院生、留学生、教職員です。今は国立も法人化されていますので、大学は理事会が教職員を雇って、学生を募集し、研究と教育をやっていく事業ということになっています。私的企業の面もないとは言えませんが、利潤を上げることが目的ではなく、公益性の高い事業になっています。

そこで公益性を守っていくために、あらためて教授会の役割が非常に大事になっていると思います。大学の自治の要は教授会の自治であると言ってもいい。教授会がしっかりしているかどうか、大学とのあり方を決めていくといわれてきましたが、今こそますますそうであると言えるでしょう。しかし、それが今、非常にあいまいになっています。

そこで、この面を補強するために、教職員組合の役割、学生・院生自治会の役割、および留学生の処遇などを考え直すことが、きわめて大切なことになってきています。教職員組合が教授会における教員の言動をバックアップする。学生・院生自治会が教授会と向き合い、学生・院生の立場から大学の問題を指摘し、教授会のまともな対応を要求していく。留学生は、もっとも弱い立場におかれているので、教職員組合や学生・院生自治会が彼らの立場を代弁し、グローバル化の流れに遅れないようにしていく。そういうことが必要なのです。

しかし、こうしたことに、今の大学の先生たちも、かつては敏感だった学生や院生も非常に弱くなってきているのではないのでしょうか。そういう意味では、今の大学は非常に危ない状態にあるのではないかとも思います。

5 大学生協は大学市民の協同組合

そういう状況のなかでの大学生協の役割をあらためて考えていかななくてはなりません。そのさい、大学生協は大学構成員の協同組合なわけですが、これからはもっと、大学市民の協同組合なのだという意識を強めていかななくてはならないでしょう。

大学はもともと、市民社会のなかにあって、その委託を受けてそのための研究を行い、それに基づく教育を展開して、さまざまな専門性をもった市民を養成していく機関です。その意味では、大学構成員とくに学生・院生は、大学社会の市民であることをつうじて市民であることを学び、これからの社会の市民になっていくということになるでしょう。いかなる専門性すなわちプロフェッション、あるいは一般的に仕事を遂行する場合でも、その基礎は市民としての生活です。生活の協同を学ぶことがすべての基礎になります。

大学生協をつうじてまず消費生活の協同を学び、それをつうじて社会一般における生活の協同を学ぶだけでなく、もっと積極的に協同で事業を起こしていく。とくに、大きな資本が利益にならないので見過ごしてきたが、これからますます必要になる社会的な事業を起こしていく。そういうことにも組合員の眼を向けていく。そのようなことを展望しながら、私はあえて、大学における民は学生院生教職員であり、大学生協は民の事業なのだ、といったのです。

(全国理事会－０９１０１０)